あしたばん

2012年
（平成23年
1月31日
火曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

二十号特別号

『あしたばん BOOKs』誕生

慶應義塾大学　加藤文俊研究室フィールドワーク展Ⅷ『栞』

三宅島へ訪問した際は、三宅島にある編集部。遠隔で発行している際は、大学のある藤沢市にある編集部。私たちあしたばん編集部は、場所を選ばずどこでも、記事を書き、編集する。そんなあしたばん編集部が、来る二月三日～五日、品川区に出張する。ＪＲ目黒駅近くのギャラリーやさしい予感にて行われる、「慶應義塾大学　加藤文俊研究室フィールドワーク展Ⅷ　栞」へ、あしたばん編集部員である上地里佳・大西未希の二人が出展することとなったのだ。

このフィールドワーク展は、今年で八回目を迎える。四年生の卒業制作、二・三年生のグループワーク、さらに研究室のＯＢＯＧも出展し、一年間のフィールドワークの成果を展示というかたちで発表する。あしたばん編集部は今回、昨年六月から発行している『あしたばん』の歴史を、大きな年表にしてふりかえる予定だ。展示会場では記事執筆者から検索できる目録も用意し、バックナンバーを持ち帰ることができるようになっている。編集中の裏話や、編集部員の日記などをあわせて見ていただき、『あしたばん』をより身近に感じてもらえれば幸いだ。

実はこの展示にあわせ、三宅島関連の発行物を刊行する編集社を設立することになった。今は会社組織でこそないが、今後の三宅島での研究をまとめ、発行物を定期的に刊行することを目指す。それが展示タイトルにもなっている『あしたばん BOOKs』である。発行物第二弾として用意しているのが、『三宅島研究』という冊子だ。これはいわゆる学会誌にあるようなアカデミックな用語をできるだけ用いず、「わかりやすく」三宅島での研究成果をまとめることを目的としている。展示会場にて創刊号の配布を予定しているので、ぜひ手にとっていただきたい。

（大西　未希）

慶應義塾大学　加藤文俊研究室
フィールドワーク展Ⅷ　『栞』
http://vanotica.net/fw108/
同時開催　加藤文俊研究室ＯＢ展『帯』
【日時】
二〇一二年二月三日（金）～五日（日）
十一時～二十時（最終日のみ十七時まで）
【場所】
@Gallery「やさしい予感」
東京都品川区上大崎 2-9-25
http://www.yokan.info/

過去に想いを馳せて、いまを想う。

作品展示会「フォトコン2011 in 三宅島」

緑深く生い茂るアカコッコ館。視聴覚棟では、一月末まで「フォトコン2011 in 三宅島」の応募作品が展示されている。このコンテストは今回が初めての開催にも関わらず、アーカイブ部門、データ部門合わせて二五〇点もの応募があったそうだ。応募された写真作品は、アカコッコ館の他に、東海汽船ターミナル内愛らんどショップやウェブにて、一月三一日までご覧いただくことができる。

総合グランプリに輝いたのは、アーカイブ部門に応募された田中勘一さん撮影の「天草の頭上運搬釜方処理場」だ。この写真には、一人の女性が一枚の布では包みきれないほどの天草を頭に乗せ、それを三人の女性が支えながら運搬している様子が写っている。膨大な天草の量と、それを運搬するのに女性が参加していることが、三宅島にとって天草漁がいかに大きな産業だったのか物語っていた。アカコッコ館では応募された全作品が展示されており、それらの写真に知人が写っていたり、見たことのある景色、思い出深い行事の様子があったりして、三宅島に初めて来てから1年も経っていないのにも関わらず、なんだか懐かしい気持ちになった。他にも、マグマ水蒸気爆発が起こる前の新澪池の写真や、三池地区で撮影された集合写真など、美しい松の街道など、過去と今とで大きく変化してしまった風景写真を見ることができる。今とは違う風景に切なくなる気持ちもあるが、それ以上に多くのことを乗り越えてきた島の人々のたくましさを強く感じる。

多くの人々の様々な角度で記録された三宅島の写真たちは、今もなお火山活動が続いている島だからこその変化や、今も昔も変わらない島民の意地や優しさ、強さなど、溢れんばかりの島の魅力がつまっていた。

（上地　里佳）

あしたばん特製　バインダー?!

フィールドワーク展Ⅷ　栞「三宅島研究～あしたばん BOOKs～」ブースにて、「あしたばん最高！」とひとこと言ってくださった方先着一日十名様に、これがあれば『あしたばん』を集めるのが楽しくなる！特製バインダーをプレゼントします。手に入るのは、この機会だけ！ぜひ展示会場でゲットしてください。

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

根岸明子

みやけに足を踏み入れたのは冬のこと だった。荒れ狂う海に驚きつつも、おおらかな島民、見渡す限りの自然に心を奪われた。その感動を伝えたくて、記事を書いたあしたばん。滞在中の差し入れにいただいたあしたばは、くせがあり、しかし温かい味がした。あしたばんもそんな存在。

加藤文俊

発行している立場ではありますが、第 20 号の発行をとても嬉しく思います。でも、このくらいで喜んでいるわけにはいきません。『あしたばん』であるからこそ書けることを書く。休むことなく、きちんと届ける。さらに質の高い紙面づくりを目指しましょう！

「にがったけ」の記事を書いたあと、「にがったけ、好きかね？」とお電話をいただいたこと。８月、「毎週一号発行」を目指し、毎週日曜の夜は編集に格闘して過ごしていたこと。ひとつひとつ､覚えている。一号一号、ちゃんと。発刊を重ねても、「ちゃんと覚えている」、そして伝えたい言葉を載せたものにしたい。20 号を迎え、そんなことを考えた。自分に、編集部に、三宅島に、おめでとう。

大西未希

半年前、初めて『あしたばん』を手渡したときのことを今でもよく覚えている。発行回数を重ねていくごとに「知ってるよ！」との声が聞こえるようになっていって、『あしたばん』を通じたたくさんのふれあいを持てたことが、とてもうれしかった。この先も少しずつ、島の皆さんと一緒に『あしたばん』を育てていけますように。

森部綾子

長冨将成

今回で、あしたばんは記念すべき 20 号を迎える。思えば本当にあっという間ではあったが、あしたばんのことを知っている島民や、発行を楽しみにしている人たちが増えてきていると耳にして素直に嬉しい。これからも島民に島の「あした」と笑顔を届けられるようなあしたばんを発行していきたい。

上地里佳

このかわら版が『あしたばん』と名付けられたのは、三宅島に初めて行く船中だった。あれから 20 号発行を迎えられたことは感慨深いものがある。島とのつながりが生まれ、徐々に読者も増え、かけがえのない人々に出会うことができた。これからも、三宅島での発見、喜び、疑問､好奇心を『あしたばん』で伝えていければと思う。

三島麻里江

最初に書いたのはビーチ相撲の記事だった。あしたばんを見せながら取材を始めたのを覚えてい る。この小さなかわら版を介して多くの人々と出会った。島の人にとって、あしたばんが話のネタになれば幸いだ。それと同時に島でのコミュニケーショ ンが記事のタネになる。これからも出会いを大切にするメディアであり続けたい。

『あしたばん』編集部では、
読者のみなさまからのご意見･ご要望･ご感想
をいつでもお待ちしております。

□お問い合わせ□
info@ashitaban.net
□バックナンバーはコチラ□
http://ashitaban.net/

ご愛読ありがとうございます！！

読者の皆様•編集部からあしたばんへ

昨年六月より発行を続けてきた『あしたばん』も、ついに 20 号を迎えた。
この「20 号特別号」発行に伴い、読者の皆様•あしたばん編集部から『あしたばん』へのメッセージを募集したところ、たくさんのお祝いの言葉をいただいた。

村上慧

あけましておめでとうございます。昨年の秋、赤い屋根の小さな家を担ぎ、映像を撮りながら島を一周した村上です。諸々の事情でそちらに行けないまま、４ヶ月経ってしまいました。僕はいま新潟にいます。寒いです。暖かい三宅島が恋しいです。秋に撮った映像を、島で発表したいと思っています。待っててください。

EAT&ART TARO

僕は、三宅島にいって島の人とコーヒーを飲んでいます。三宅島大学が島の皆さんに愛されて行く過程を、一緒に体感する時間だと思っています。
この時間は互いの事を知る時間でもあるし、そして一緒に何かを作って行く時間になるはずです。この時間を経て愛される出来事を生んで行きたいです。

初めての三宅島で、早朝の到着に寝ぼけ眼になりながら、その日の発刊 を目指して『あしたばん』創刊号の編集会議をしたことを思い出します。徐々に『あしたばん』が島に広がっていく過程と、自分が島を知っていくのが重なって、一緒に歩んできたような感覚です。これからも『あしたばん』を通じた出会いに期待しています。

飯田達彦

あるようで無かった、島内密着型新聞。あのオジやオバがあのお店が…誰もが主役になれる新聞あしたばん。でも、まだ今ひとつ、島民に伝わりきれていないのが残念。あしたばんの広がりと共に三宅島大学の講座ももっと広がるといいな。

田中耕介（ころっち）

相原瑛里

20 号達成、おめでとう御座います！これからも三宅島の明日を伝えていってください、30、40 とこれからも増えていくのが楽しみですね！！

新飼麻友

おめでとうございます！読者として、いち執筆者として大変うれしく思います。また記事を書く機会がいただけれ ばなぁ、なんて思います。そろそろあしたばを使った創作料理ニューなども載せてみてはいかがですか？！次は 50 号目指してがんばってください！

三宅島エッセイ

島びより

欠航流人の称号

上地　里佳

一月一九日、私は三宅島を訪れていた。今回は一泊二日の短い滞在予定。空は雲一つない快晴、陽気が暖かく、一月にも関わらず春の訪れを感じてしまいそうなほどの清々しい朝だった。しかし、その日の夕方から天候が一転、雨とともに強い風、島内放送からは東京発の船が欠航という知らせが流れた。島はまだまだ厳しい冬であったことを思い知らされた瞬間だった。その日から二日間は船、飛行機ともに欠航。一泊二日のはずだった予定は、三泊四日となった。

島外との交通機関が断たれたことで、私の週末の予定は一変した。三宅島での時間ができた私は、お世話になっている方々に会いに行くことができた。築穴製菓に行き、夏に築穴さんたちとよく行った『彦七』にご飯を食べに行った。伊豆避難施設を見学しに行けば馴染みの管理人さんに会うことができ、島名物の芋餅を焼きながら最近の三宅島の話をしながら楽しい時間を過ごした。行きたいと思いながら、夏以来ずっと行くことができていなかった商店にも顔を出すことができた。椿の花を鑑賞しながら歩いていたら道に迷ったり、おばちゃんが私の顔を覚えていて嬉しくなったり、新たな出会いも生まれた。夕ご飯に美味しい鍋と梅酒をごちそうになって、お互いの近況や懐かしい話で夜更かしもした。初めて着発の船を体験して、早朝にも関わらず用意されたサントモさんの鮭おにぎりの美味しさが身に染みた。もしかしたら、これが冬の島の醍醐味なのかもしれない。島には何者も出入りしない日々、自身ではどうしようもできない自然の力を身近に感じ、商店に卸される商品は徐々に減っていく。それでも島民は悠々とした心持ちで、自然に抗うよりも、それを受け入れて楽しんでいるような印象さえ受ける。

「欠航が二日以上続いた人たちを『欠航流人』って言うんだよ。」と欠航二日目に言われた。その言葉は、面白おかしく、しかし的確に私たちを表現していた。この状況下を嘆くのではなく、私たちをポジティブにさせてくれる言葉だった。私はその称号をありがたく頂き、貴重なお土産を手に入れた気持ちで三宅島を後にした。

『あしたばん』の記者大集合！

二十号を記念して、これまで記事を投稿してくれた記者一覧と、各々の記事の合計を整理してみた。なんと、これまで『あしたばん』に掲載された記事は計一一九記事も存在した。多くの人々に『あしたばん』が支えられていることを実感するとともに、これからもよりよい誌面づくりに力を注いでいきたい。

【飯田達彦】
一号　表『始動、三宅島大学！』
二号　裏『道具を通じてみるそれぞれの旅　村上慧さん』
三号　裏『島が好きで好きで仕方ないから』
号外一　表『一同集結』
他、計十四記事

【岩橋文弥】
八号　表『もう少しで、届きそう。』

【上地里佳】
二号　表『民宿つくばのお母さん』
号外一　表『あしたばん制作の裏側に迫る』
五号　表『パピロってなんですか？』
六号　表『川越から三宅島に想いを馳せる』
他、計二四記事

【大西未希】
一号　表『異国籍船上パーティーから』
二号　裏『はじめて出会った島の味、「にがったけ」』
三号　裏『巨大な紙に軌跡を残す』
四号　裏『三宅高校なう。』
他、計二四記事

【小澤慶輔】
一号　裏『意気込み！インタビュー　サバイバルのプロ五十嵐靖晃』
二号　表『ぐるり一周』
四号　裏『三宅島リサーチ経過報告』
五号　表『リサーチ期間終了』

【加藤文俊】
十四号　表『キックオフのあとで、考えた。』

【川村恵理】
十九号　裏『ひと足早い、クリスマス』

【喜多直人】
四号　裏『お土産を受け取りに。』

【佐藤悠】
五号　裏『生徒とのふれあい』

【新飼麻友】
一号　表『始動、三宅島大学！』
二号　裏『道具を通じてみるそれぞれの旅　上地由衣さん』
三号　表『水中スケッチ大会行われる』
四号　表『伊ヶ谷港に高速ジェット船あらわる』
他、計九記事

【関取花】
十九号　裏『初　三宅島でともった灯』

【高木静香】
一号　裏『意気込み！インタビュー　加藤文俊教授』
二号　表『スケッチブックに描かれた三宅島』
三号　表『水中スケッチ大会行われる』
『大久保浜はステージ』
六号　表『お待たせしました！「あしたばん」』

【廣野吉隆】
十八号　裏『島びより「怖い」という気持ちがどこかにあった。』

【仲尾千枝】
七号　表『まだ見ぬ三宅島を思う「ロック～わんこの島～」』

【長冨将成】
一号　裏『意気込み！インタビュー　加藤文俊教授』
二号　表『ぐるり一周』
三号　裏『一メートルのコミュニケーション』
四号　表『二時間／三年間にかける思い』
他、計八記事

【根岸明子】
十八号　裏『島びより　島の洗礼』

【橋本匠】
十四号　裏『僕の足、島の石、人の意思。』

【丸本智也】
十八号　表『ポスター完成！！「ポスターをつくろう」講座』

【三島麻里江】
十二号　裏『伊ヶ谷でビーチ相撲大会開催』
十三号　表『学生のあかし』
十五号　裏『優しさの味』
十六号　裏『島びより　島空模様』
他、計五記事

【水谷晃毅】
十九号　表『甘い香りと笑い声につつまれて～三宅島クッキーをつくろう～』

【村上慧】
五号　裏『半・島民になりたい』
八号　裏『海の教室』

【森部綾子】
三号　裏『島が好きで好きで仕方ないから』

【安野太郎】
号外一　裏『潮風をあびながら』
五号　表『たくさんのありがとうを』
六号　裏『三宅島をふりかえってみる　島をあとに』
他、計六記事

【安野太郎】
八号　裏『三宅島大学開校式の為の音楽メンバー募集』
十号　裏『神着太鼓の勝手な分析』

【吉田あんな】
号外三　表『初めての三宅島への思い』
十三号　表『"いま"が響き続けるように』
十五号　表『ポスター完成！　ご協力ありがとうございました～』
十七号　表『冬の三宅島へ―キャンドルをつくろう―』

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。